中南米，大洋州を旅して (その二)

吉田 哲夫*
Tetsuo Yoshida

12月21日朝サンパウロを出た *Cruzeiro du Sul* 航空機はポルトアレグレの上空を通過してウルグアイに入った。国境のサンタアナ高地を越えると風景は一望千里の大平原にかわり(紫の国ともいう。紫色にかすんだ平野が遙か彼方につながっているからである)，ユーカリの林がところどころにあるだけの眺めとなる。余裕のある旅行なら，サンパウロ→イグアスの大瀑布→モンテビデオ(ウルグアイの首府であり，南米第一の歓楽都市)→ブエノスアイレスと飛べば面白かろう。ウルグアイの草原がつきるところがラプラタ河(河というより海である)で濁流を大西洋に押し出している。ラプラタ河上空に出ると対岸にブエノスアイレスが霞んで見える。アルゼンチンのこの附近も機上からは何の変哲もない平原(いわゆるラパンパ)でしかない。高度を下げるとやっとところどころに牛舎や牛の姿が見える。着いたイゼイ

ザ国際空港の周辺はもちろん遙かにつながる牧場だ。騒音公害など到底考えられそうにもない。

クリスマスに近いというのにブエノスアイレスのまちは静かで街路には何の飾り付けもなかった。夏場のクリスマスとショーウィンドの雪のサンタクロース，馴れぬ者には変な感じだった。

アルゼンチンの化学工学の中心はサンタフェにある大学とラプラタ大学であることは今より約10年前2年3カ月にわたってこの国の *Tucuman* 大学に 客員教授としておられた佐藤敏夫氏から聞いていた。

サンタフェの大学

サンタフェはブエノスアイレスから *Austra Ala* というアルゼンチンのローカル航空路で約50分のところにある人口25万人ぐらいの静かな市都で，パラナ市の対岸付近に位置する。ラプラタ河からパラナ河をさかのぼりサンタフェ港に1万トン級の日本の船が時折り寄港するそうである。この付近は 500 km 行って 1 m しか高低差が

昭和47年8月18日受理

* 大阪府立大学工学部化学工学科
(〒 591 堺市百舌鳥梅町 4-804)
TEL 0722-52-1161

ないといわれるところで、したがって沼がたくさん続いている。サンタフェにあるのは Litoral 国立大学の化学工学部で化学、生物化学、食品工学の学科によって編成されている。ここでは私のやっているような機械的単位操作の方面の仕事はほとんどなく、触媒反応や反応器のプロモデルらに関する研究が主流であったが、それでも私らが以前にやっていた過熱蒸気雰囲気中での物質熱同時移動の研究に興味を持ち、是非共若い人達に話してくれというので、アメリカで役立たせる目的で用意していたスライドをもとにゆっくりとした調子でお話した。結論に至るプロセスの話の途中で質問が出て多少苦しかったが終ると全員拍手で謝意をあらわしてくれた。この化工には A. E. Cassano 氏らアメリカやドイツ帰りの若手がいてなかなか活気がある。南米で heterogeneous Catalysis の研究で有名な J.M. Parera 教授が Professor Coordinate の A.W. Ellena 先生と共に小生をドライブに連れ出してくれた。南米のモータリゼーションは日本より一足早く起ったためか道路はよく整備され、しかも走っている車の数は日本より問題なく少ない。パラナ河の河底に最近で上がったタイル張りのトンネル（長さ約 2.4km）を通り抜けて対岸のパラナ市に行き、悠々と流れるパラナ河を眺めながらアンデスの麓にできるという葡萄酒と特産のビフテキの御馳走になったのが印象に残る。

Merchuk 君

サンタフェから再びブエノスアイレスに戻り、今度は鉄道で、ラプラタに、大学を訪ねて行った。ホテルから Plaza Constitucion まで行くのに地下鉄に乗ったが、ここの地下鉄は60年前（第一次大戦直後）にできたもので長いエスカレータをもっている。乗った国鉄の列車はディーゼル機関牽引車で機関車にも客車にもイタリアのフィヤットのネームプレートが貼ってあった。

アルゼンチン中部のコルドバにはりっぱな鉄道工場があるらしい。列車は真直ぐに引かれた鉄道を 100km/hr ぐらいのスピードで走る。この路線は近く、日本のある会社によって電化されて輸送量を増加すると聞いている。約50分でラプラタ駅に着くと Mr. Merchuk が迎えに来ていた。

彼は7年ほど前に京大の化学工学科に留学したことのある人で、吉田文武先生によればなかなかの英才であるそう。たどたどしい日本語（もう大部忘れたとのこと）でも小生には有難い。大学での諸先生の紹介や、町の案内やら、適当に引きまわしてくれた。ここの工学部の化学工学科の Director Dr. J. Ronco 先生は Latin A-

merican Journal of Applied Chemistry and Chemical Engineering の主幹で日本の KAGAKU KOGAKU との交流を盛んに希望しておられた。Merchuk 君によると、

アルゼンチンでは現在、7年の小学校、5年の中学校（授業は、毎日4時間で午前中だけで、宿題を沢山出すそう）をへて、大学に進むのだが、近い将来中学校を Common year（3年）と、Additional year（3年）に分けて高校程度の専門教育も行なえるようにするのだそうである。大学入学は自由で在学年限は5～6年で、入学後1年たつと学生数は約半分になって振りおとされ、卒業時には20～30%になってしまうそう。そして学生一人一人に卒業までに工場実習（Market study をも含む）と、Industrial Project（一つの plant・Complete design）あるいは卒業論文を要求するようになっているので、これを6年間でやれない学生も相当出てくるらしい。大学院は修士2年、博士2年であり、化学工学では今年4月より博士コースをスタートさせるのだそう。

ラプラタからの帰りは Merchuk 君に自力で寄せ集めて作ったという自動車にのせてもらって途中、ペロン前大統領作品の子供の国に立ちよったが、国会議事堂、博物館、教会、など色とりどりでお伽の国そのもののような町ができていた。ブエノスアイレスでは彼はラプラタ河畔に並ぶ屋台店風のレストランに案内してくれた。ここは牛や羊の肉を消炭で照り焼きしたアサードという料理を出すところであり、夏だったので歩道にまで持出したテーブルで食べさせるのだけれども、アルゼンチンの代表的料理とはいえ、これはどう見ても臓物料理で豚の血を固めたソーセージなど日本人の口に合いそうにもなく同伴の川田さんも困ったような顔をしておられた。

余裕があれば

日本から一番遠い国アルゼンチンに来て大学だけを訪ねて歩くのはつまらない。タンゴバンドで夜のブエノスアイレスを楽しみ、また南部のパタゴニアやアンデスのふもとの千古の森林や湖、渓谷のある壮大な国立公園などへ汽車やバスやレンタカーを利用して大草原をゆっくりと旅すれば面白そう。

アルゼンチンというところは

私達は12月25日ぎりつめた旅程のためにブエノスアイレスから一飛びに西へ、空の旅も味気なく、約2時間でメントザ市に来てしまった。メントザはアンデスを越えてチリーに入る峠口で、ここからバスが山越えてチリーのサンチャゴ市に行く。メントザ附近は葡萄の有名な産

地だが地味は砂漠に等しい。私達が訪ねた時も2年間雨が降らないとかでカラカラであったが、それでも街路樹は大きく成長し緑をたやさない。これは万年雪をたたえたアンデスの副流水のおかげである。タクシーに連れて行かれたのが古めかしい大きいホテルだったが、クリスマスのためか、日中、森閑として人の気配がない。1階の薄暗いバーにバーテンが1人いた。Bianchi Cabernet という値段の高いブドウ酒を注文したが、言葉が通じないので独りで手持ぶさだった。ところが突然私の肩をたたいた人がいる。「あなたは Japones か」という。「そうだ」と答えると始めて親しく話しかけて来た、見ると40才ぐらいの東洋人である。「自分は戦前、日本で高校の先生をしていたが南米に憧れてアルゼンチンへ農業移民で入国し、3、4年ブエノスアイレスの近くで花作りをしていたが現在は古美術品業をやっている福中という者だ……」と、それからいろんなことを教えてくれた。彼の話によるとアルゼンチンの田舎の大牧場主や葡萄酒の醸造家の金持の家には思わぬ掘出し物の骨董がある。そして最近の相場を知らない者が多いので、それをかぎつけて買い受けロンドン、パリ、ニューヨークの市場に送り込むと、1,000ドルで買った品が10,000ドルぐらいにはなるそうだ。またアンデス山脈を中心にチリー、ペルー、ボリビアと歩いていると、インデオの珍しい遺品が手に入ることがあるので、しばらくはここに滞在して次はペルーに行くのだといていた。花作りなど馬鹿らしくできないらしい。こんな仕事をしている人にはそれなりの素質があり、健康で才覚があり向う気がある。人生いづこにも青山あり、またいづこにも墓場ありという感じだ。彼には助手一人いるのみで家庭はなかった。

彼の話しによると、アルゼンチンは昔は米英と伊の経済的勢力の争いであったが、今日では独と伊の勢力争いである。儲けるものは金持と軍人、政治家で、連中は自分の財をスイス、ベネズエラに分散させ、国の事など考えず、自分を富ますことのみである。したがって特定の個人に金があってアルゼンチンの国自身は貧乏であり第2次大戦で儲けた金は今は影も形もなく消えてしまった。たまるのは外国からの借財のみで何をやるのにも借金せねばならない。国家予算の60%は軍事費で外国から戦車、飛行機を買うが、軍人や政治家は皆袖の下を要求するので財をなす人が多い。ブエノスアイレスを中心に国鉄を電化しようとして入札が国際的に行なわれて日本は主として丸紅(株)が力を入れ、ほぼ成功する段取りになったが、しかしその間、国鉄総裁が幾人も変り、その都度袖の下を出して話を継いでおく必要があるので商社はあまり儲けてはいないと思うと。彼の話はこのよう

な国家の裏話しかから次第に裏街の女の話しまで及んで行った。

午後11時頃からホテルの玄関前に緋の絨氈(じゅうたん)をしきつめて、クリスマスのお祭のダンスが始まった。曲は比較的静かなタンゴメロディーから次第に熱を帯び、ジャズ調へと変って行った。純白のイブニングドレスの女性に赤い絨氈、白と黒の色調のバンドの人達、それらがライトに映えて本当に美しい。空気が澄んで星の綺麗な空から梢をなでて舞い下りる涼風が熱気を適度に拭いさってくれる、人々は嬉々としていつ終るとも知れない、時計は午前3時を廻ったので、われわれは次の旅を思っ引きあげた。

チリー

メンドサからアコンガクア(7,035m)の麓をぬってアンデスを越えてチリーに入る鉄道と自動車道路とがある。いずれもサンチャゴまで1日の行程である。私は車でアンデス越をするためにわざわざメンドサに立寄ったのであるが、このルートで地上を通るとチリー→南太平洋→ニュージーランドへの年内の渡洋フライトがとりにくかったのであきらめることにして川田氏と共にアルゼンチン航空に乗った。飛行機ではたった30分でサンチャゴに着くので味気ない(この地上ルートの時間表は日本ではなかなか手に入り難い)。30分間の飛行であった乾季のせいか一天雲なくアンデスの山々が手にとるように見え、写真が十分にとれたのがせめてもの慰みであった。

サンチャゴのインターナショナルエアポートで強制的にドルを公定レートでチリー通貨(Escudo)に交換させられその証明書(これは出国のとき必要)をくれた。その理由は後ほど2倍以上の闇レートで容易に交換できるためであることがわかった。インフレのための通貨不安の一端が初めての入国者にもそれとなく感じられた。

チリーは70年前硝石で栄えたが近代化の立ちおくれで今はこの国の経済は苦しい。サンチャゴの主要建物は硝石ブームの時にできたものらしく古くて薄汚いものが多い。翌日(27日)サンチャゴ大学に化学工学の S. Droquett 教授を訪ねた。チリー国立大学は150年の歴史をもつ古い大学で、現在もまだ昔からの組織をあまり変えてはおらず、学舎もサンチャゴ市内に500カ所に散在している。この2、3年でこれらを東西南北の4つのキャンパスに集合するそうであるが、今日のような経済実情では無理といわざるを得ない。というのは市民の足である地下鉄工事が未完成で風雨にさらされたままになっている。この方が、先決なのだ。この大学では、工学は

Physical and Mathematical Science 学部でやっており、これは日本の理工学部に関連するもので化学工学はこの学部の化学科に属しているが近く学科に昇格させるそうである。化学工学実験室は学生用のものは立派だったが教官用のものは貧弱で研究費の不足で困っているらしい。S. Droquett 先生からはチリーの教育システムについて詳しく聴取することができた。

チリーの石油工業や製紙工業はサンチャゴより南にあり、殊にコンセプシオン附近には石油コンビナートを持っている。化学工学科もコンセプシオン国立大学の方が充実している。この大学では日本から佐藤敬夫先生が約半年間教鞭をとられた。私は28日にこの大学を訪ねて行ったが乾ききったサンチャゴ (Dry season のためか) と対照的にしっとりとして静かなところであった。大学のキャンパスにはよく整備された新しい建物が多く、28 の School がここに集まっていて、化学工学教室は School of Engg. Civil に属している。当日は遠来の日本からの客のために一日中のスケジュールまで作って歓迎してくれた。まず単位操作研究室 (A. Searle 教授) から単位反応研究室 (R. M. Sanhueza 教授) へ、それから最後は食品工学の Ingo Junge R 教授の部屋へ廻った。私が食品加工に興味をもっていると連絡しておいたための心使いらしい。先生はドイツ系のチリー人で英語もドイツ語も堪能で速口でまくしたてられたので当方たじたじの体であった。先生の作り出した特殊品種の大豆がコンセプシオン付近の畑で栽培され、植物蛋白や植物油の原料となり貴重なものだそうである。ここでも研究費不足で困っていて、日本の大学から測定機器など借用することができないだろうかといっておられた。欧米の大学からはそのようなことが可能であるらしい。

チリー人は貝やアワビが大好物らしくコンセプシオンの町で Ingo 先生に御馳走になった料理 (名前は忘れた) が腹にこたえ、二、三日調子が悪かった。

南太平洋

お世話になった本保さん (玩具の卸と小売をサンチャゴの繁華街でやっておられる) や仲吉さんの親切に感謝しながら12月30日、1971年最後の渡洋航空機 (この便は週に1回しかない) をキャッチして南太平洋をタヒチ島に向った。

タヒチ島のパヒエテまで9時間半ぐらいかかるらしい座席は一つとして空席がない、これで9時間半辛抱させられるのかと思っていたが途中イースタ島に給油のためおりることがわかった。

イースタ島についてのはサンチャゴを出てから4時間

写真1 神秘のイースタ島

半たつてからのことで、この島は南米大陸から約 3,000 km 西方にある。一見してわかる火山島で比較的なだらかな丘陵で山地に草が一面に生えていた。飛行機が着くと跣足 (はだし) のポリネシア系の原住民がより集まってきてなにか分らぬことを口走る。待合室は掘建小屋同然で何の設備もなく、便所もない。地面に板を敷いて人面石像の人形など売っている。この 120km² の島には草原に巨大人面石像、墳墓、石碑など考古学上きわめて貴重な遺跡が数多く残っているそうである。給油に約2時間ついやすので、その間にジープをやとえば十分遺跡をまわることができるらしいが言葉がわからぬので何とも仕方がない。

ハビーテ (タヒチ島) に着いたのは午前1時頃であったが、できたての素晴らしい空港で、ここはランチリー航空の終点なので、美しいチレーナーがサービスに出て花輪を首にかけてくれた。しかし外では熱帯の驟雨 (しゅうう) が沛然と降っていた。原住民はポリネシア系であるが、1842年以来仏領になり、現在は1,400人のフランス人と3,000人あまりの中国人によってほとんどが占められている。1891年ゴーガンがこの島にわたり、島の風物を書いて紹介したので有名になったのは周知のとおりである。チリーの Junge 教授が冗談まじりに「俺が行かぬ先にあらすなよ」といっていたほどこの島のポリネシア御婦人の接待は昔は有名だったらしいが、今ではマナーは欧米流であるので裏道はその道のベテランに案内してもらい必要があろう。海岸の道路はよく整備され、花が咲き乱れ鳥が歌う常夏の楽園そのままの姿であるが海岸には砂浜がなく、サンゴ礁である上磯 (ふか) がいてどこでも泳げるという訳にはゆかない。

ニュージーランド

除夜の鐘ならぬフラダンスと喧騒のジャズのうちに元旦を迎えたわれわれは午前2時ハビーテ空港よりニュージーランド航空の客となった。3時間ぐらいたって日付変

写真2 ケネディー教授夫妻（ニュージーランド、クライストチャーチ）

更線を西に向って越え、一度に1月2日となった。つまり1972年の正月元旦はわれわれにとっては約5時間で過ぎてしまったことになる。午前7時ニュージーランドのオークランド空港にすべり込んだ、初夏の朝風に牧草の匂いをする。一步踏み出せばなだらかな曲線を描くアルファルファの牧場だ、「いいところですね」「いや南米の方がよかったですよ」「いやとんでもない……」「あなた達はいまだお正月の雑煮も食べていないでしょう、ひとまづ自分の家に来ませんか、お餅ぐらいはありますよ」「心臓を発揮してお邪魔しましょうか……」とは親切にも朝早くからお迎えに来て下さった（株）丸紅のオークランド支店長吉田さんとの会話だった。

行ってみると丘の斜面に建った奥さんと子供さんと三人暮らしの瀟洒（しょうしゃ）なお宅で、見知らぬ者に既知の人に対するように接待して下さったが、思い合すと今回の2カ月間の旅先で接した人達は一部の旅行業者を除いて皆心から親切にして下さった。外国人も、日本の方も、国を離れて示される友情はとりわけ身にしみる。

翌朝、南島のクライストチャーチに向って出発した。飛行時間で1時間足らずである。クライストチャーチ（人口253万人）にはカンタベリー大学がある（この大学には1968～69年にかけて日本の坂田選手がラグビー留学をした）。私はこの工学部化学工学科のA.M. Kennedy教授を訪ねた。Kennedy先生は私の訪問予約にたいして事前にあなたが来られるときは夏休み中ですが、正月のNational Holidayであるので誰も大学にいないかもしれないが、自分は旅行から帰っているのだから来てもらってもよろしいとのことであった。親切にも先生は空港で待っていて下さった。

大学構内はよく整備され、静まりかえっていた。私が案内されたキャンパスはILAM site Campusというところで主として理学部と工学部が集まっている。理学部の物理、化学のビルディングは8階建て堂々たるもので

これらにScience Lecture Theatreが附属しており、これを中心に数学、心理学、地質、地球物理、植物、動物らのビルディングがある。

工学部は機械、電気、土木、化学工学の建物がそれぞれの実情に合せて独立棟として建られ、化学工学はエレベータ付きの5階建のビルディングに入っている。欧米の大学がそうであるように教官研究室、講義室、実験室廊下ら皆、床は磨きたてられ、Students Unionと称せられる学生集会所も整然としていて、南米の大学に見られたような汚ないポスターや落書きなど少しもなかった。人口286万人のこんな小さな畜産、酪農国がどうしてこのような立派な大学をたてて維持も十分にできるのだろうか。

国の1971年度の歳出表を見ると、全国家予算中教育費を含めた社会保障費が49.1%で、国防、行政、建設、産業開発らの費用が50.9%となっている。なお教育費だけで15.1%を占めていて、一方軍事費は6%程度である。国際総合収支は黒字であり、1971年8月で外貨準備高が5億6千万ドルとなっている。小型ではあるが安定した国家経済といえよう。ちなみにニュージーランドでは教育費は19才まで無料であり、また公立病院では費用は一切無料である。しかし所得税は累進的に高くなり、最高は所得の62.5%をとられる。日本の商社マンで所長級の人でも既に62.5%とられているそうである。

クライストチャーチは庭園の都と呼ばれるだけあって確かに美しい。ケネディ先生夫妻は半日かけて大学の農学部附属農場附近やら噴火湾にある天然の良港リトルトンらに案内して下さった。ここまで来たのだったらMt. Cook (3,764m) 国立公園のタズマン氷河を訪ねるべきだよ。この氷河はヒマラヤと南極を除いて世界最大のものでクライストチャーチに来る日本の観光客の大部分はこの氷河を飛行機で訪ねるのが目的なんだ。君が次に来る機会があればこの氷河とそのさらに南にあるミルフォード・サウンド（フィヨルド）の上を飛びたまえ。世界で最もスリルに富んだ観光ができるよ、とのお話だった。

私は来た道をそのままオークランドまで戻り、翌日オーストラリアに向って出発したのだけれども、ニュージーランドの地味は日本に似てしかももっと裕かであり、静かだ。日本の喧騒をしばらく離れ、ここでゆっくり勉強すれば素晴らしいだろうと思われる。

メルボルン

オークランドを午後3時半頃出たQantas機は夕方6時過ぎ、どんよりと曇ったメルボルンについた。空港に

は鳥居さん（丸紅、メルボルン支店長）と福井君（京大化学工学科を出て、すぐメルボルン大学に留学中）が待っておられた。

メルボルン大学の案内はすべて福井君のリードに従ったが、彼は京大在学中ドイツに一年留学し、今回はオーストラリア政府の留学生募集に応じてきたなかなかのファイトマンで若い内になるべく国際的感覚を身につけようとする彼の意図には敬服する。彼がこの大学を選んだのは公害関係ではオーストラリアで第1人者であるといわれる Dr. W. Strauss の名声によるのだそうだが、先生は本を書くのが上手で福井君がやりたいと思っている微粒子に関する研究など全くやっておらず与えられた仕事は充てん塔での窒素酸化物の水による吸収であったのは失望の様であった。

化学工学科を訪ねたのだが夏休暇中にもかかわらず実験に取り組んでいる人が多く、特に目を引いたのはプロセス実験室であり、室の西側にフレームが組まれてそれにハードボードで作ったようなパネルがあり、学生はそのパネルの上にプロセスを組み立てパイピングをしてフレームにはめればよい。そしてフレームの後方には空気、水、ガス、電気の共通ラインが通っており、それらに連結すればよいようになっている。（いわゆるカセット式）各研究室を、一巡した後に Acting Prof. の Harries 先生の部屋でコーヒーとウイスキーを御馳走になりながらオーストラリアの教育よもやまについてお話をうかがったが、そのうちに工学部長の Siemon 先生（化学工学科の Full Prof.）や Senior lecturer の Martin 先生、褐炭研の Bull 先生らが加わって座が賑かになった。私からは、日本の教育組織についてお話した。

ほかの国でも行なわれていることであるけれども大学に入学しようとする高校生は Higher School Certificate Examination をうけて大学入学への Matriculation（資格証明）をとらなければならない。工学部の入学者選考委員会は Matriculation をもった多数の志願者に対して Order-of-merit という表を作って英語表現、化学、物理、数学の点数を重要視して上から順に入学許可を与えてゆくのだそうである。なお大学の教員構成は

英国式のブラミッド型で、

Full Professor

Acting Professor (Full Prof. 不在のとき代理する人)

Associate Professor (准教授)

Senior Lecturer

Lecturer

Senior Demonstrator (助手に相当する)

学部長を
選挙する
選挙権を
持つ

Demonstrator（大学院学生で1時間5ドルぐらいで働く）

のようになっている。Full Professor は各学科1人であり、この大学の化学工学科では Full Prof. の Dr. Siemon が工学部長に選出されたので Associate Prof. 格の Harries さんが Acting Prof. をつとめていることになる。Full Prof. の権限は絶大で、したがってその秘書嬢でも物すごく威張っていて彼女の気嫌をそこねると教授に会うことすらできないそうである。

ニュージーランドでもそうであるようにこの国でも移住についてはうるさく制限するが人種的差別はほとんどなく、とくにこの頃日本人には調子がよい、というのは英国が EEC に加盟すると、この国は日本にもっともっと沢山第一次産品を買ってもらわなければやって行けなくなるからである。オーストラリアの国土の3/4は砂漠か不毛の土地とはいえ、日本の約20倍の面積に住んでいる人間の数は1/4しかない。しかも政治は安定し、経済収支も毎年2億ドルづつぐらい黒字である。われわれ旅行者にもそれが肌身に感じられる。

キャンベラとシドニー

メルボルンからキャンベラ市へは鉄道か自動車が面白からうに飛行機で来てしまった。メルボルンとシドニー間は国内線の ANSET と TAA とが競合して30分おきぐらいに便がある。私の乗ったのは DC-9 のエアバスジェット機で、機上で飴1個をもらっただけでキャンベラ空港についた。ここで乗ったタクシーは丘を越え、森を抜けて私を Motor Lodge につれて行った。そこは小じんまりとして静かで、綺麗なプールがあり、子供が1人泳いでいた。「Mt. Fuji の国から来たのか……」と声をかけてきた。可愛らしい男の子だった。

メルボルンは人口250万人、シドニーは280万人であり、豪州ではこの二つの市が飛び抜けて大きい。勢力あらしの結果、首府を両都市の中間のキャンベラに1908年（明治41年）におくことにきまり、アメリカのワシントンをモデルに建設にかかり、1927年（昭和2年）首府がここに移されたとき。思うにブラジルの首府ブラジリアがまたここを参考に作られたのだ。私は20日前にブラジリアを訪ね建設着手以来15年たった現在、まだ未完成の公共建物があるのを見てそのスピードのおそいことをなじったのだが、キャンベラは首府として完成されるのにもっと長くかかっている。

私は今回の一連の旅行で世界の代表的計画都市ワシントン（1790年遷都）→ブラジリア→キャンベラと見て来たことになるが都市計画専攻の学者であつたら、そ

写真3 シドニー港（ヨットハーバー風景）

の推移がよくわかって、また私とは違った意味で良い旅行になったであろう。これらのうちでキャンベラが一番スケールが小さかったが、まち全体が隅々まで美しく、どの通りもどの街も樹木でおおわれているのは印象的であった。聞くところによると市民は連邦政府から自分の庭木をそだてる義務を負わされているのだそうである。

夏休み中としてこの大学には訪ねる人もいなかった。ので1泊2日の滞在で次の予定地シドニーに移った。

シドニーに来て始めて町の温（ぬ）く味と、賑かさと混雑を感じた。ここはオーストラリア第一の都会でありそして第一の港であるのかかわらずこの海はわれわれの東京、大阪の海と比べて問題なく美しい。水は紺碧で、砂浜には人々が泳いでいる。

私の訪問先きの New South Wales 大学の School of Chemical Engineering はシドニーの Kensington という所にある。校庭のローンはよく刈り込まれてスプリンクラーが水を散いていた。この School の Professor Dr. J. S. Ratcliffe にお会いした。彼はここの立役者で大変忙しい人らしく、スピーディーなしかも張りのある話し方でオーストラリアでは化学工学のある大学はどこどこだとか、そのうちで一番大きいのは自分らの居

る NSW 大学だとかいう話だった。NSW 大学には七つの学部があり、また学部はいくつかの School から成りそしてこの School はいくつかの Department に分れている。School of chemical Engineering は応用科学学部に属し、この School には Pure Chemical Engineering, Food Technology, Fuel Technology, Biological process Engineering の四つの Department があり、各 Department の教授は Associate Professor であり、Full Professor は School の段階で約二人ずつの割合で存在しているにすぎない。いわゆる英国式編成である。それからちょっと変わったやり方に教授連中が集まって経営している Unisearch limited と称するコンサルティング会社がある。これは会員制度をとっており、州政府はこれを奨励しているとのこと、つまり日本でやっている研究受託を目的とする大学附置の科学研究所方式を経営方式にかえたようなものであろう。

御馳走になった昼食の席上で Ratcliffe さんが「われわれは水の無い土地を沢山持っている、そしてそこには地下資源がねむっている、これを開発するために日本はもっと金と技術をもってやって来てくれ」と都合の良いことをいったので「豪州はいまだに White Australia Policy をとってこんな広い土地を白人で独占しているのはけしからん」と私が言い返したら「君達は27年前にこの土地をとりに来たことがあるのじゃないの……」ときりかえされた。

私達は大学を出て北の郊外にある Manly というところから日本製のハイドロホイルに乗って中港を横ぎって有名なハーバーブリッジまで来たが、第二次大戦の折に日本海軍の潜水艦がこの下をもぐってシドニー湾に入っただという事実は確かに忘れられてはいなかった。

これで（1月10日）私の50日間にわたる太平洋周辺の大陸をまわる旅行を終り、ジャカルタ、香港を経由するルートで帰国の途についた。